

三宅村の  
竜王さん





ふるさと創作民話

そうさくみんわ

みやけむら

三宅村の

りゅうおう

竜王さん



むかしむかしの、三宅村の吾助爺さんの話をちよつと聞いてくだんさい。

ある日、稲の苗を植えんにやあいけん時期になって、吾助爺さんは、田んぼの中で空を見上げて言うた。

「梅雨じゃ言うのに、こう日照りが続いちゃあどうにもならんう。雷さんは、どこへ

いつちよるんかいのう、何をしちよるんかいのう、どうなつちよるんかいのう。」

隣の善作爺さんも、干上がった田んぼを見ながら悲しそうにこう言うた。

「これじゃあ、田植えが出来んでえ。えらいこつちやあ。」

今年やあ どうしやあ ええんかいのう。」

それを聞いた吾助爺さんは頷いて言うた。



「やっぱり、雷かみなりさんに、なんしても来きてもらわんにやあ、どうにもならんがのう。ほいで、雷かみなりさんがんばつてもろうて、でんでん太鼓だいこをほんぽん打うつて、雨あめを呼よんでもらわんにやあ、どうにもならん。わしや、そう思おもうんじゃがのう。」

そこに、お婆ばあさんが近寄ちかよつて来きて、二人ふたりにこう言ゆうた。

「そんな訳わけの分わからん事ことを言ゆうとるより、ふたりで名主なぬしさんに相談そうだんに行いつたら、どうかいのう。名主なぬしさんは、あんたらより、ずうつと知恵ちえしや者かしこで賢ひとい人ひとじゃけのう。」

お婆ばあさんにそう言ゆわれた二人ふたりは、互たがいに顔かおを見合みあわせて、さつそく、名主なぬしさんの所ところへ相談そうだんしに行いつた。

名主<sup>なぬし</sup>さんはふたりの話<sup>はなし</sup>を聞いて、

「困<sup>こま</sup>ったもんよのう。実は、毎日<sup>まいにち</sup> 村<sup>むら</sup>の衆<sup>しゅう</sup>が泣<sup>な</sup>きついて

来<sup>き</sup>とるんじゃあ。そいで、わしも、日々<sup>ひび</sup>思案<sup>しあん</sup>しとったが、

まだ、ええ考<sup>かん</sup>えが浮<sup>う</sup>かばんのじゃがのう。」

そう言<sup>ゆ</sup>うて、腕<sup>うでぐ</sup>組みをして考<sup>かん</sup>え込<sup>こ</sup>まれた。

暫<sup>しばら</sup>くして名主<sup>なぬし</sup>さんは、ひとつ手拍子<sup>てびょうし</sup>を打<sup>う</sup>たれて

こ<sup>ゆ</sup>う言<sup>ゆ</sup>われた。

「そうじゃ、もう限<sup>げん</sup>界<sup>かい</sup>じゃけん、もう、良<sup>よ</sup>かろうでのう。」

遠<sup>とお</sup>く<sup>そら</sup>の空<sup>みあ</sup>を見上<sup>みあ</sup>げて、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>に言<sup>い</sup>い聞<sup>き</sup>かすようにそう言<sup>ゆ</sup>うて、続<sup>つづ</sup>けて、



「はあ、わしらの気持ちきもちは、きつと神様かみさまも分わかつてくださつとる。そうじゃ、そうじゃ。そいじゃ  
けえ、すまんが、あんたら 二人ふたりでのう、明日あしたの朝あさ、村むらの衆しゅうに、ここへ集あつまってくれるように、  
村中むらじゅうを回まわつてくれんかいのう。」

吾助ごすけ爺じいさんと善作ぜんさく爺じいさんは、

「名主なぬしさんが、ええ案あんを考かんえなさつたんじゃ。」と、喜よろこんで、

ふたてに分わかれて名主なぬしさんのことづてを、村中むらじゅうに言ゆうて、かけずり回まわつた。

「何なんの集あつまりかのう。」

「何なんの話はなしかのう。」

「何なにか、わしらが、悪わるい事ことをした言ゆうて、名主なぬしさんに怒おこられるんかのう。」





村人はあつちこつちで、それぞれの思いを、言い合つた。

夜が明けると、村人達がぞくぞくと名主さんの庭に集まつた。もちろん、吾助爺さんも善作爺さんもいた。

名主さんは母屋から出て来られるなり、沢山の村の衆を見て言われた。

「みなの方、おはよう。朝はようから集まつてもらつてすまんことです。実は、きのう、吾助さんと善作さんがやって来てのう。雨が降らんで困つとると、言うて来たんじゃ。

そりゃあもちろん、わしもこないだから、こう雨が降らん日が続くんで、はよう何とかせんやいけんと、思うとつたんじゃがのう……。そこでじゃ。わしや、きのう腹を決めたんじゃが。」

名主なぬしさんは一気いっきにしゃべって、一息ひといき入れて

またつづ続けてこう言ゆうた。

「わしの爺様じいさまから聞きいた話はなしじゃが。それはのう、

この先さきの二にの釜かま（竜神釜りゅうじんがま）にあるご神体しんたいの青石あおいしを、

竜王りゅうおうさんのお社やしらにお祀おまつりして、神主かぬしさんを招まねいて

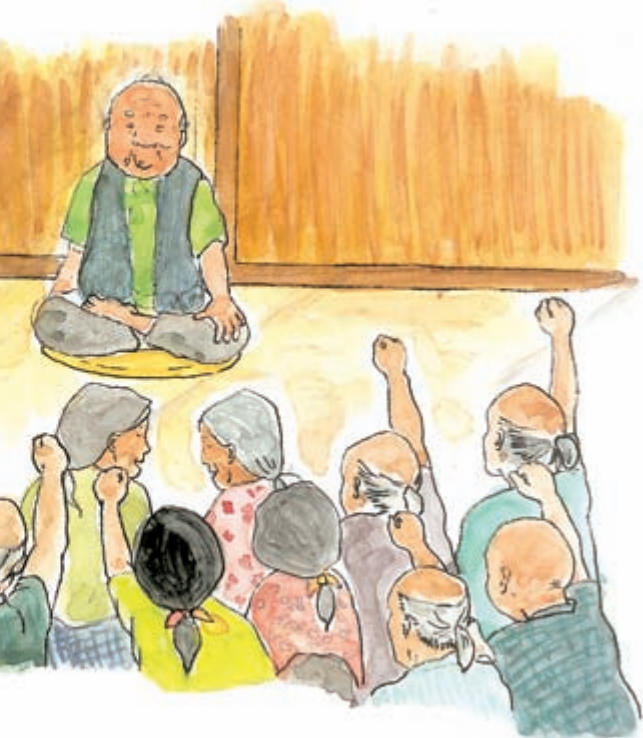
『雨乞あまごい』をあめすると、雨ふが降はるといはな話はなしじゃが・・・。

みんなも、この話はなしを聞きいた事ことがあるうがのう。

わしもやってみようと思うが、

この考かんがえ、どう思おもうかのう、どうじゃろう。

みんなでやってみようじゃないか。



みんな手を貸してもらえんかのう。」

村の衆は、名主さんの話が終わると、一斉に、

「ほうじゃ ほうじゃ。」

「やってみよう。」と、言うてこぶしを天に突き上げた。

そして 名主さんの納屋から、くわや、かまや、

ほうき等を持ち出して、二の釜に向って急いで、

走って行った。さすがに二の釜も干上がっていた。

村の衆は釜に溜まった小石や砂を、竹かごで

すくいながら取り除いた。



「あつた、あつたぞ。青石があつたぞ……。」

釜の中をじいっと覗いていた名主さんは、青石をご神体と見定めると、

「そうつとそうつと。」と言うて、大切に取扱いよう大声で促した。

ご神体の青石を釜から取り出すと、谷の上にある竜神社（貴船神社）へお運びし、改めてきれいな水で水垢を取り除き、ピカピカにした。

そして、お社の中の真新しい布団の上にお祀りした。

さてさて名主さんは、特別な祭壇を造り、雨乞いの祈祷の準備に、ひとり、てんてこ舞いであつた。

名主さんは一番上の棚の中心に、お神酒を供え、左右の白い榊立てに榊の小枝をさし、二段目の棚には、お米 野菜 お頭付きの鯛等を供え、さらに、三段目の棚には、柏餅を大皿に一杯盛って供えた。

名主さんは、祭壇の準備が一段落すると、額の汗を手拭で拭き、村の衆に向かって言うた。

「みんな準備が出来たぞう。こっちへ集まった、集まった。今から雨乞いのご祈祷をしてもらうぞう。」

すると、すぐさま、お社の前には多くの村人達が集まって来た。

白衣をまとい、きりりと締めた袴をはき、黒いえぼしを

かぶった神主さんが、お社の前に静々と進まれ、



凛々しく立ちまわれ儀式が取り始められた。

神主さんは、まず、二礼二拍手を恭しく厳かに行われ、祝詞を読み上げられた。

名主さんも、吾助爺さんも、善作爺さんも、村人達もみんな、静かに頭を垂れ

『竜王さんに雨乞い』を心の底から願った。ご祈祷が終わると、まず 青石のご神体を、元

のようにきれいになった竜神釜にお戻しした。

その後、村人はお神酒と沢山の柏餅を頂きながら、

「竜王さんのご尽力で、恵みの雨がきつと降るでえ。」

とお酒の威勢も借りて、信じきって、喜び合った。

翌朝、吾助爺さんはいつもより、はよう目が覚めた。

